

contents

東日本大震災復興支援プロジェクト	1
第5回北東北性教育研修セミナー報告	7
性教育の現場を訪ねて③	10

Dr.上村茂仁の性の悩みクリニック⑮	12
多様な性のゆくえ③	13
今月のブックガイド	14
JASEインフォメーション	15

◆東日本大震災復興支援プロジェクト

東日本大震災から6年経過した思春期の子どもたちから、
思春期ピアカウンセラー[®]が学んだこと

ライフライン：人生設計を書いている時の様子が印象深かった。震災当時小学2年生の時期の幸福度が下がっていて、「飼っていたペットが亡くなって……」と言いながら書いていたが、もしかしたらそれ以上に悲しいことがあったのかもしれない……と感じた。

発表の時は震災にふれる子とふれない子と様々だったけれど、違う学校に通わなくてはいけなくなり、大変な思いをしたが、今はここに帰ってこられて、知っている友達にまた会うことができ何より嬉しいと、今の幸福度を高く書いている子が多かったのが印象に残った。

日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会代表 高村寿子

はじめに

東日本大震災被災地は震災から6年経ち被災各地では急ピッチで除染作業や盛り土工事などに追われているが、残念ながら震災前に戻る復興の道筋ははるかに遠い。

筆者は日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会として日本性教育協会の助成を受けながら、思春期ピアカウンセラー[®]たちと共に福島・宮城・岩手県の中学・高校に出向き、パワーレス状態におかれた被災地の若者が住み慣れた地域で仲間と共に、将来の人生の夢に向かって生き生きと生きる力を取り戻す：エンパワメントすることを目的に、思春期ピア支

援事業を継続実施している。

具体的な活動は思春期ピアカウンセラー[®]たちが、ピアカウンセリング手法を駆使して被災地の若者の人生の夢再構築を図ると共に、コミュニケーションスキルの習得を含む生＝性の健康教育や心のケアのための相談活動である。

実施校および内容の検討と具体的なプログラム

1) 実施校とその地域特性

2月下旬から3月上旬の2泊3日で、各県1校計3校の中学2年生に行った。

(1) M県Y立S中学校

海岸沿線地域は原発被害がないものの、津波被害



ピアエデュケーションに行く前に津波で亡くなった方々が眠る納骨堂へお参り

が甚大でそれこそ近親者を失い心のケアや生きる意味を必要としている若者が多い状況にある。

そこで将来の夢を考えるという作業を通じて自分を見つめ直し、自己の性を受容し、これからの生きる希望や夢を実現するために自分の心や身体を大切にしていくなこと、人生の夢は自分だけでなく仲間にもあることなどを再確認させることで仲間・友人や自分を支えてくれる人たちとの人間関係を再構築する。

- 生徒数2年生3クラス
- 思春期ピアカウンセラー[®]18名 引率者：3名

(2) F県M市O中学校

(同市K小学校の一角に建てられた仮設校舎)

F県M市O区は、東京電力福島第一原子力発電所から20キロ圏内に位置し、原発事故後に「警戒区域」に指定された。平成27年12月当時1万2000人の住民が避難生活を送っていた。

そのO区で唯一の中学校だったO中学校は、現在、原発から北に37キロ離れたK小学校の一角に建てられた仮設校舎で授業を行っている。

O中学校の生徒数は340人から100人弱に減り、子どもたちの6割が仮設住宅で暮らし、毎日、バスで通学しているが、平成29年4月からO区に戻り、新設された校舎に帰還することが決定している。実施内容は上記S中学校と同様である。

- 生徒数2年生1クラス
- 思春期ピアカウンセラー[®]15名 引率者：1名

(3) I県K郡O町立O学園中部

沿岸部で甚大な津波被害を被ったO町は、至る所で盛り土工事が突貫工事で進んでいる。

東日本大震災で使用できなくなった小学校4校と中

学校1校の計5校が入居する仮設校舎を町内の運動公園にプレハブ校舎で建設し、小・中一貫校として開校しているが、昨年度新校舎が完成・移転し、学園生活は表面的には沈静化している。実施内容は上記3中学校と同様である。

- 生徒数2年生3クラス
- 思春期ピアカウンセラー[®]15名 引率者：2名

2) 内容の検討と具体的なプログラム

実施内容の検討に至って、従来の、①自分を大切にすること、それは心と身体と将来の夢を大切にすること、②自分を支えてくれる他者の存在を尊重し、その人たちとの間で信頼し合うコミュニケーションが取り合えるようにすることを基本的には踏襲することにしたが、そこで思春期ピアカウンセラー[®]数人から、以下のような意見が出された。

- ①震災直後から間もない時期はライフラインを書けない子もいたけれど、今、避難していた所から住んでいたところに戻ってきている子が増えているとしたら、前の仲間と再開し自分の夢も取り戻しているかもしれないし、それを仲間に聞いてもらいたいと思うので、ライフラインを大切に実施したい。
- ②被災地だからといって思春期の発達課題が変わるわけではないので、特別なプログラムをするのではなく、日頃行っている中学校の内容を行うべきで、特にLGBTQに関して入れ込むべきである。パワーレス状態だからこそそのことで余計に苦しんだり悩んだりしている子がいるはずだから……。

そこでそれらの意見を尊重して次ページのタイムテーブルを完成させ、3校とも同じプログラムで実施

3 中学校共通 タイムテーブル

H29.2.27 (Mon)、2.28 (Tus)、3.1 (Wed)

タイトル 「カラフル～あなたという花を咲かせよう～」

全体の目的

- (1) 自分自身のことをよく知り、そういう自分を好きになり、周りの人たちの素敵なおところを知り、自分の存在や相手の存在も大切にできるようになる。
- (2) 過去、現在、未来の自分について改めて見つめてみて、一人一人がかけがえのない大切な存在であること、自分を大切に思うことと同時に、人生の中で出会う人を同じように大切に思えるようになってほしい。
- (3) 人が人を好きになる対象の選択にちがいがあっても、自然なことであることを受けとめる。

時間	主内容	具体的内容・方法	目的	物品	音楽
13:10 (10)	挨拶 自己紹介 ラポール	・ピアっ子の紹介 ・ピアっ子自己紹介	・ピアっ子を知ってもらう ・緊張をほぐして、話しやすい雰囲気を作る ・ピアっ子と仲良くなる	・ピア説明の紙 ・ハッピールール ・タイトル ・名札の紙 ・ラポールの紙 ・ラジカセ ・いす	ねこバス jazz ver
13:20 (15)	色いろいろ	・色いろいろ	・自分の気付いていない、新たな自分を発見するきっかけを作る ・改めて相手の長所を知る ・自尊心を高める	・ポジショニング ・タイトル ・例の紙 ・質問の紙	Run away
13:35 (35)	ライフライン Gシェアリング	説明・書く・発表 (各10) ・ピアっ子のライフラインを例として示す ・みんなに自分のライフラインを書いてもらう ・グループ内でそれぞれライフラインを発表する	・自身の人生を考えることで、自分自身を見つめるきっかけを作る ・過去、現在、未来について考え、どれも大切な自分であることを知る ・みんなのライフラインを見て、自分とは違う人生があることを知る ・ライフラインを大切にすることは自分を守ることにつながることに気付く	・ライフライン 模造紙 ・ライフライン を書く紙	説明 My world 書く ピアノ曲 発表 Neve gone
14:10 (10)	アンドロギュノス LGBTQ	・アンドロギュノスの神話の紹介 ・どの様に感じたか、インタビューする ※インタビュー項目例： 人を好きになる対象の選択にいろいろあるって知って、どう思ったかな？ ・多くの仲間と違う対象の選択に気づき始めた仲間の悩みを紹介する	・人を好きになることは、人間が成長発達していく過程で、ごく自然なことであることを知る ・人を好きになる対象の選択はさまざまであり、違いがあることを知る ・あなたと違ういろいろな対象の選択をしている人も、人を好きになる気持ちは皆同じで大切にしたいものと言うことを理解する ・多くの仲間とは違う対象の選択に気づき始めて、悩んでいる仲間の気持ちを聴いて、どんな選択をしても、あなたはあなたでありのままのあなたで素敵だよと受け止めていくことを支える	・アンドロギュノスで使用する劇の物品 ・LGBTQの物品	Make it Hollywood
14:20 (10)	好きな人ができたら	・思春期では性の関心が高まってくるが、そのことは自然なことであると伝え、グループで共有する ・お互い思い合える関係の構築を大切にしよう	・思春期は性への関心が高まっていく時期で、それも成長していく過程で自然なことであることを知る ・相手に近づきたい接近欲求、触れたいという接触欲求が高まる時期であり、自分がそうであるからと言って相手もそうであるとは限らないことを知る ・自分の意見も相手に伝えることができ、かつ相手の思いも理解することが大切だということを伝える	・タイトル ・接近欲求、接触欲求の紙 ・自己決定の紙 ・手紙	World is turning

14:30 (10)	大切なもの	・自分自身にとって大切なものは何か考えてもらう ・ピアっ子自身の大切なものを紹介する ・ハートの紙を使って書き方を説明する	・自分の周りには自分を支えてくれる人やものがあることに気付ける ・支えてくれる人やものがどんなに大切なものであるか再確認する	・ピアっ子のハートの紙 ・ハートの紙(封筒)	説明 I'm your angel 書く ピアノ曲
14:40 (5)	振り返り タイトルの説明	・目を閉じてもらい、今日伝えてきたことを振り返る ・タイトルの意味を伝える ・自分たちで作った字を朗読する。	・今日感じたことや気付いたことを共有する ・タイトルに込めたメッセージを伝える ・今日のみんなへ送りたい思いを詩に込めて伝える	・タイトル	オルゴール曲 * 詩を朗読するときは音楽をとめる
14:50 (5)	感想	・受けた感想を書いてもらう		・感想の紙	

※終了指定時間5分前には終了するように、終了予定で時間調整を図っています。

J★STARS PEER (参加人数 13名)

見守り はるか

*1組 おがわ きょうか さちえ やえ *2組 けい みちこ ひろこ テレサ *3組 いく かずき としぞー まき

することとなり、オリジナルな教材作成やリハーサルを入念に準備した。

実施状況と生徒の反応

実施状況と生徒の反応を、1) 人生設計、2) LGBTQの2視点に焦点を当て、思春期ピアカウンセラー[®]のレポートから報告する。

1) ライフライン：人生設計

思春期ピアカウンセラー[®] S

ライフラインのセッションを担当した。ライフラインの中で思い出したくない震災の記憶を思い出させてしまうのではないかと大きな不安があった。しかし、実際にはそれは杞憂に終わった。何人もの子たちがライフラインに震災のことを書き、それを乗り越えて今は幸福度が高いことを書き、紹介してくれていたの、辛い過去を受けとめ今を強く生きる子たちの姿を目の当たりにすることができた。

その中で1人の男の子が「将来の夢を叶えるために一度Oを出るけど、引退したら帰ってきてOに骨を埋めたい」と話していた。その言葉が胸に響き忘れられなくなった。復興のために今からでも何か力になりたいと思う気持ちが大きくなった。

思春期ピアカウンセラー[®] O

ライフラインのセッションが心に残っている。それは、グループの子の多くに3つの共通点があったから

である。

- ①「誕生」を高い幸福度を書いていたこと。
- ②「震災」はみんなと離れ離れになったから幸福度が低いと話していたこと。
- ③「震災」で下がった幸福度が上がっており、現在は80から100%の幸福度になっていること。

の3つである。「誕生」を高い幸福度に表す、また、現在を高い幸福度に表すのが多い傾向は、どの中学校でも見受けられた。

現在に幸せを感じていて、生まれたことを嬉しく受け止められていることを表わしていると考え、辛い経験を乗り越え、前向きに生きる意欲を取り戻すことができているのではないかと思った。そして、「震災」はみんなと離れ離れになったから幸福度が低いと話すが多かったことから、辛い経験を乗り越えるパワーとなったのには、幼い頃から共に過ごしてきた同級生、友達、仲間たちの力があつたのだと強く感じた。

2) LGBTQ

思春期ピアカウンセラー[®] Y

アンドロギュノスのセッションに続くLGBTQの紹介では、最初「ピアっ子たちは何を言い始めたのかな」というような反応がみられたが、好きな人ができたら……に続くと、他のセッションと比べて恥ずかしさもあつてか反応しづらそうだったのは、被災地に限らない思春期ならではの感情なのだと感じた。

特に今回初めて取り入れられたLGBTQの同世代



震災があったとき、私たちは小学2年生だった。

の当事者の手紙を読む部分は、好きのかたちが周りと違うと感じる人の気持ちを真剣に聞き、実際にグループの話し合いでは「人それぞれだし、いろんな好きのかたちを認めていきたいよね」という意見が出てきて、好きになる対象にはさまざまなかたちがあることを理解し素直に受け入れていた。

思春期ピアカウンセラー[®] N

LGBTQ の話をした時に、クラスが少し盛り上がった。どうしてだろうと思っていたところ、担任の先生がカミングアウトしている先生で、生徒にとってLGBTQ の言葉はとても身近に感じられていたということが後でわかった。

「もうあれが普通だよね」という言葉を言っていた子がいたが、自分たちが伝えようと思っていた「LGBTQ の人もいるんだよ」というメッセージが、「LGBTQ っていう私たちとは違う人もいるんだよ」というメッセージに置き換わっていないか、そうはならないように展開していくためにはどうしていけばよいのか改めて考え直したいと思う一言だった。

以上4人の思春期ピアカウンセラー[®]の学んだことから、問題点とこれからの課題を整理してみる。

まず、ライフラインのセッションから浮かび上がってくる問題点と課題として、震災当時小学2年生であった生徒のほとんどは、この時期の幸福度はとても下がっていたが、それでもその子なりに自分のなりたて夢を語ってくれていた。

発表の場では、あえて小学2年のところだけ飛ばす子や、言葉に出さない子もみられ、6年前に負った傷がまだ癒えていないことも推察された。

そんな中、たった一人の親友が津波に流されてし



ギリシア神話によると、私たちもともとアンドロギュノスだったんだ。私たちの劇をみてね。



皆、聞いてくれるかな。私は女の子、そして同性の女の子にこころひかれるんだ。これって、変かなあ。

まったこと、親戚が未だ行方不明であること、転校先で被災地から来たというだけでいじめを受けていたことなどを話してくれる生徒たちもいて、ライフラインをただ共感・共有してエンパワメントを図るだけでなく、勇気を持って話してくれた思いをありのままに受けとめられる場の必要性を痛感した。

LGBTQ に関しては、あるクラスではその情報を伝え始めたところ、急に盛り上がったそうである。担任の先生が自分の性：セクシュアリティが同性愛であることを生徒たちにカミングアウトしているので、子どもにとってLGBTQ の言葉がとても身近に感じられており、ごく自然に受けとめていたという。

また別のクラスでも、最初“ピアっ子たちは何を言い始めたのかな”というような反応だったが、レズビ안의同世代の当事者のメッセージが書かれた手紙を読むと、好きの形が周りと違うと感じる人の気持ちを真剣に聞いており、グループの話し合いでは人それぞれだし、いろんな好きの形を受け入れたいと、好き



津波ですべて流された土地の盛り土工事、それを見守るご先祖の墓

になる対象にはさまざまな形があることをありのままに理解し、自然なこととして受け入れられていることは、これからの学校や地域の生活の場での対応方法の一助が見いだされたように考える。

今後の課題と方向性

思春期ピアカウンセラー[®]たちは異口同音に、被災地ピアだからといって特別視するのではなく、日ごろ行うピアと同様の内容で展開してよかったと受け止めていた。

他方、3校とも特に大きな問題を抱えているような印象を受けなかったが、周囲の皆が復興に向けて頑張っているこの環境の中で、悩んでいることや鬱々とした思いを表出しているのか、そして一緒にその思いを語れる場が少ないのではないかと感じる場面もあったという。

大人や周りにいる仲間と被災の記憶を共有した上で、瞳を輝かせながら薬剤師になりたいのだと語った女の子の夢や、おじいちゃんの店を継ぐのだと少し照れながら話してくれた男の子の夢を聴いて、思春期の若者が夢を持ち、その夢に向かって頑張れるような環境を周りが作っていくことが、これからの被災地復興につながっていくのではないかなと感じたと、反省会で異口同音に述べていた。

また、現実的な問題として県内外に避難している子へのいじめといった問題も浮き出てきている。仲間の絆は大きな力を持ち、辛い経験や現実を乗り越える力



小高い丘に新築された小中一貫校

を若者に与える一方、一方で間違った方向にいくと、ピアプレッシャー、いじめ、いじめの無視につながっていく危険性が孕んでくる。

5年継続してきた思春期ピア支援事業の次のステップが必要な段階に来ていることが痛感される。そこで、I県K郡O町の今後の取り組みにその突破口の一端が見いだされるので、簡単に紹介し校を綴じる。

O町の思春期ピア支援事業の今後

①活動目的

O町で皆が頑張っているこの環境の中では、思春期の若者たちが生や性について、悩んでいることや鬱々とした思いの表出できる場、一緒にその思いや悩みを語れる場が希求されている。

また、O町からI県内外に避難している子へのいじめといった問題も表出してくているので、若者同士が心開き相談し合い、どうしていくか自己決定できる場を設置する。

②事業企画者

鈴木るり子（岩手県立看護短期大学）、高村寿子（日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会）

③第1回検討会

趣旨に賛同する有志が参集して、今後どのように地域を調整し、立ち上げていくか協議する。

④内容

O町思春期ピアカウンセリング（生＝性の相談活動）構築に向けて。

●第5回 北東北性教育研修セミナー報告●

QUEER STUDIES & PRACTICES

クィア・スタディーズと実践

去る4月22日、青森市において第5回北東北性教育研修セミナー2017春「QUEER STUDIES & PRACTICES」を開催した。翌日は第4回青森レインボーパレードの日でもあり、各地でのセクシュアル・マイノリティに関する活動を紹介すると同時に、当事者たちがどのような思いで活動を始め、継続しているのかをクィア・スタディーズの視点を交えながら話し合った。

北東北性教育研修セミナー実行委員会共同代表 岡田実穂

今回の発題者は皆さん1984年生まれ、活動場所は福岡・東京・青森と離れているが、SOGIE (Sexual Orientation, Gender Identity and Gender Expression) に関わる研究・活動をしており「同期会」をつくっている。それぞれご自分のテーマを持ち活動を進めている。

地方において、同時に話しを聞く機会は少ない人選であったと思う。それぞれの当事者性を持ちながら自らのテーマに向き合い続けている3人の姿が、参加者にとって学びや実践のきっかけになったセミナーであった。

生き延びるための実践、連帯、場所

佐々木裕子氏（東京大学大学院博士課程）には、「クィアとは何か?」「クィア理論とは何か?」という今回のセミナーの基礎となる部分をお話いただいた。

クィアとは何か、クィア理論とは何か、については、佐々木氏の発言から要点をまとめ以下に引用する。

QUEERは元々、「変態」という意味もあるがそれにも増した強い侮蔑語、口に出すことも憚れるような言葉だった。それを、性的マイノリティたちが敢えて引き受け、自分たちが使うことによってその言葉の意味を「奪い返す」、侮蔑の意味で使えなくさせてやる、という文脈で使われてきた。「クィアとかそういうの

じゃないんです」「正しい市民なんです。権利をください」という風には言わない。悪い人／いい人という線引きで自らを“まとも”とする社会に抵抗する言葉／事象としてクィアは存在している。そして、クィア理論とは何かというと、単に性的マイノリティに関する学問というわけではなく、性についての規範を問い、マイノリティを取り巻くマジョリティ側の社会・法・制度・言語・文化がどのように異常／正常を線引きし、どのように作用するのかを問い直す。また、その線引きそのものをどう揺らがすことができるのかを実践していくもの。

佐々木氏は性に関する倫理感やヒエラルキーについて、ゲイル・ルービンが1982年に発表した「善良な正常な祝福されたセクシュアリティ」「邪悪な異常な不自然な呪われたセクシュアリティ」の図を例に挙げてその差異を紹介された。

ポイントはヒエラルキーの高位にいる人は社会的制度的な保障や恩恵にあずかることができ、下位にあれば精神病や犯罪者とみなされたり、社会的・制度的・経済的制裁を受けたりする。性は多様、みんな違ってみんなよい、では済まされず、「そこにヒエラルキーが存在している」。下に行けばいくほど、生きることは難しいものになるという事実を提示された。

また、クィア理論という言葉を初めて使ったのはテレサ・デ・ラウレティスだが、1980～90年代にアメ

リカで使われていたゲイ&レズビアンという言葉によりゲイとレズビアンの中のジェンダーの差異や、それぞれの間／中での人種・階級・社会的立場での差異が一般化されてしまうという当時の彼女の異議申し立てが紹介され、それぞれのセクシュアリティや性自認を現代で言うところのLGBTというように一括りにせず考えて行くことの大切さを伝えてくれた。

エイズパニックでの当事者たちの可視化やアクティビズムの盛り上がりの中で、クィア・アクティビズムやコミュニティは積極的な批判を行ってきた。単に異性愛／同性愛というだけではなく、例えば黒人・シングルマザーに対するバッシングのように、性的な要素と絡むしかたで交差的・横断的に差別はあることに警戒を促してきたのだ。クィア理論は何かと言えば、やはり性的マイノリティだけの問題ではない、「正常」と対立する者たちの怒りなのだと実感した。

1980年代から現代までの理論的考察を紹介いただくと同時に、自らの10代からのセクシュアリティについての悩みや、日頃の生活の中での葛藤等も多くシェアしていただき、学問をしている限り解決しなければと思うけれども「解決した時点でクィアじゃない」し、揺れ動きながらいるということを話していたのが印象的だった。理論は、常に揺れ動きながら、実践を伴って成熟していくのだろうと感じた。

福岡県内のLGBTQユースと居場所

2番目の発題者である石崎杏理氏は、福岡においてFRENSというLGBTQユース（24歳以下）をサポートする団体に所属している。石崎氏は、小学校教員の経験や子ども支援や相談支援の現場で働いて学んだことを活かして、LGBTQユースのメンターや講演活動を行っている。

FRENSは居場所作り、啓発、相談支援という3本柱で活動をしている。居場所作りとして、「にじだまり」という誰でも参加できる交流会と24歳以下のLGBTQの子や「そうかも」と思う子たちの交流会「FRENS タイム」の活動を行っている。それぞれに、必要と思った経緯や始めるまでのプロセスを含め説明していただいた。

啓発活動として「やっぱ愛ダホ！」で、天神においてメッセージの読み上げや展示を8年前から行ってい



る。「罵声をあびせられるんじゃないか」「生卵ぶつけられるんじゃないか」と不安を感じながら始めたが、あまり嫌悪的な反応はなかったそうだ。唯一、「殺人鬼よりゲイの方がこわい」と呟いて去っていく人がいたが、話を聞いてくれたり、展示をしっかりと見てくれる人にも多く出会えたという。当事者たちが活動を始める際、現実として嫌なことも、そして嬉しいと思えることも可視化されていくのだと感じた。

昨年度は180回ほど学校現場でお話しをすることがあったという。幼稚園・保育園の先生向けの依頼が多く、幼稚園や保育園で強いジェンダー規範を教えている園もあることから、必要なのだと感じたという。中高、大学、市民講座や人権講座、行政職員への研修も増えたとのこと。

カミングアウトをしたお子さんがいる学校で、がんばっている先生もいれば、これはまずいという発言や対応をしてしまう先生もいる。そうした事例を紹介する中で、保護者の意向というものを大事にする傾向が多く見えることがあるという。

「お前と話してたら俺までゲイと思われる」というようなトンデモ発言をするような先生はLGBTQについてだけではなく、他の場面でも同じ様な発言をしているという話はとても印象深かった。トンデモ発言をした教員がいる学校では人権研修を実施していないなど連続性があることについては、北東北では「人権」の概念があまり浸透しておらず（北東北には「部落は無い」という言説も一つの要因だろう）、非常に研修等がやりにくいという実感もあるので、強く納得するところがあった。

今、学校現場との関わりの中で気になっていることとして、出生時に割り振られた性別に合致しない性表現をする子どもを全てトランスに割り振ろうとする傾

向、すぐに診断を求めるような傾向、クエスチョニングの切り捨て、はっきりしたものがあるということをも求めてしまうということについて、子どもの主体性、自己決定権を大事にして、困難は何か、その困難をどう取り除けるのかを一緒に考えたいという。カミングアウトしていてもしていなくても安心して過ごせる学校、侮蔑的な発言がない、先生たちが研修を受ける、相談などの情報に触れることができるという状況を目指して、日々学校現場との関わりを続けているということだった。

青森レインボーパレードへ

最後に「LGBTIQ とレイプサバイバー 青森から全国へ」というテーマで私自身が2009年から続けてきた性暴力サバイバーの当事者団体レイプクライシス・ネットワークでの活動実践を踏まえ、青森県でのコミュニティカフェ運営、国政、県政、市制での政策提言、当事者サポート、そこでの事例や課題について話させていただいた。内容については、紙幅の都合で省く。

以下にセミナー開催のまとめを書かせていただく。

今回、クィア理論をテーマにと思ったのは、北東北セミナーの事務局を置く Community café & bar Osora ni Niji wo Kake Mashita で起きた様々なヘイトに端を発する。

店の壁に「焼き払え」「早く墓場に行け」などと張り紙をされたり、壁を笑いながら蹴って行く人、粗大ゴミで入り口を塞がれることもあった。また「正しい市民」として街に馴染むべき（パレードをして権利主張をしたり、役所にクレームを言ったりするべきじゃない）と言われることも少なくなかった。

目の前に困難があり差別や偏見を投げつけられる中で、私たち自身にとっても今回のクィア講座は必要なものであった。QUEER を引き受けて無力化する過程は、私たちにとって、今この時にも必要としているものだ実感した。この話しをこの街の人たちと聞いたことを本当に嬉しく思っている。

翌日は天気にも恵まれ、101名の参加をいただき第4回青森レインボーパレードが開催された。3人で始めたパレードが4年目にして100人を超えたこと、本当に感極まる思いだった。

青森をはじめ、北東北から当事者が集まったこと、



福岡、和歌山、大阪、東京、北海道…さまざまな場所から、それぞれの思いを携え一緒に歩いてくれた人もいた。人通りの少ない道を、それぞれのメッセージを抱え、道行く人に手を振り胸を張って歩く。地元ラジオ局が同行取材をしてくれており、翌日ラジオで流された街の人からの反応を少し意識して紹介したい。

「全然いいと思いますよ。何か迷惑なことがあるわけでもないし。え？ 自分の子どもだったらとかは考えられないけど（笑）」

「別に人様に迷惑かけなきゃいいんじゃないの。ただ、戸籍をいじるとか、そういうのはちょっとね」。

「楽しんでましたね！」という記者のインタビューに対し、北東北性教育研修セミナー実行委員会の理事の1人である山下梓が「本当に楽しかった。でも、ここには明日からの生活に不安を抱えている人もいて、その人たちにとって、明日からまた頑張ろうって思える時間になったらと願っています」と話したことが、非常に印象深く残っている。

パレード終盤、手を振る参加者に対してバスの中から親指を下に下げるハンドサインが投げつけられた。この街で、私たちはクィアそのもののなのだ。それを卑下するつもりはない。私たちは、クィアという言葉の意味を奪い取るための闘いを、これからも続けていく。

北東北性教育研修セミナー実行委員会では、8月12日（土曜日）に秋田でLGBT成人式を初めて開催する（twitter : @lgbt18116553）。また、9月2日（土曜日）には「性の健康デー」に合わせ、岩手においてインターセックス当事者を招いてセミナーを開催する予定だ。北東北から、これからも性に関する学びの場を、そして、マイノリティとされる人たちにとっての生きる場所をつくっていききたい。

性教育の現場を訪ねて ③

〔埼玉県富士見市立水谷中学校〕(上)

職員全員を巻き込んで 計画的に性教育を行う

埼玉県南東部、首都圏 30 キロ圏内にある富士見市は、首都圏のベッドタウンとして発展する一方で、市内に湧き水や雑木林が点在するなど豊かな自然に恵まれた地域。その富士見市内南部に位置する水谷地区・富士見市立水谷中学校では、性教育授業の一環として、今回助産師による出前授業が行われると伺って、学校を訪ねた。

道徳や総合学習の時間に組み込んで指導する

富士見市立水谷中学校の生徒数は、249 人。各学年ごとに毎年継続して行っている授業がある。それが性に関する特別活動指導「命の授業」である。1 年生は「大切な命」をテーマに年に 4 回、2 年生は「さわやかな男女交際」、3 年生は「私たちの生き方を考える」をテーマにそれぞれ年に 1 回行われる。

「中学生は第二性徴を迎え、心も体も著しく発達する時期。自我が芽生え、性や異性に関する関心も高まるところです。しかし、巷には性の誤った情報が氾濫し、暴力的な事件も増えています。身近な人の生死に触れる機会もほとんどなくなり、『生』や『死』について考えることも少なくなりました。

そこで、1 年生には「大切な命」というテーマを設定して、総合的な学習の時間、道徳などの時間を使って、年に 4 回、特別活動指導を行っています」と語るのは、今年（2017 年）3 月まで水谷中学校の性教育の中心を担っていた江原文養護教諭である。

1 年生はかけがえない命について考える学習や、おもりの入った妊婦ジャケットを着用する妊婦体験、赤ちゃん人形を抱っこする体験。さらに実際に地域の子育て中のお母さん数名を招き、出産や子育ての話を聴いたり、本物の赤ちゃんともふれあう体験をしていく。

日常生活にない貴重な体験

ゲスト・ティーチャーとして参加してもらう地域のお母さんへの声かけは、江原文養護教諭が市の 4 か月健診に出向いて、赤ちゃんふれあい体験の案内を配り、

埼玉県富士見市立水谷中学校 校長・上堀 護
生徒数 249 名
職員数 31 名 (2017 年 5 月 24 日現在)



赤ちゃん人形を抱いて、小さな命の重さを感じとる

お母さんたちに授業参加の協力を頼むという。

「最初はけげんな顔をされる方もいますが、授業の主旨を説明すると、『私でお役に立つなら』と快く引き受けてくださいます」と江原文養護教諭。

参加してくれたお母さんたちからも「赤ちゃんと一緒に体験ができた」と好評を得ているようだ。また、生徒たちからも「赤ちゃんはすごく柔らかくてかわかった」「出産のときは想像以上に大変だったといっていた。だから、命は大切にしたいなと前より思うようになった」「子育ての大変さがわかり、親に感謝したい」などの感想が寄せられる。

赤ちゃんとふれあう機会がなくなった現代の中学生にとって、ゲスト・ティーチャーのお母さんたちから出産・子育ての喜びや苦労話を聞いたり本物の赤ちゃんを抱っこすることは、命の尊さ、大切さを実感できるよい機会となっているようだ。

性に関する指導 年間指導計画

学年・目標	主題／授業形態	指導のねらい	指導内容
1 年 自他の命の尊さや生きることの素晴らしさを実感させ、自分の健康は自分で守るという態度を養う。	「命について考える」 1 時間 ・ビデオ視聴（赤ちゃん誕生 10 か月の物語）他・詩の朗読。	・生命はかけがえのないもので、代々受け継がれてきたものであることに気づかせる。 ・生命誕生の仕組みを理解させる。 ・自分も他者も大切に育まれてきたことを確認し、命を大切に思う気持ちをを持たせる。	・命の生の側面。 ・生命誕生の奇跡。 ・命の死の側面。 ・最近の死傷事件。 ・電池が切れるまで。 ・ハッピーバースデー 3・11。 ・親からの手紙。
	道徳「あなたはすごい力で生まれて来た」 1 時間 ・ワークシート、話し合い。	・「かけがえのない存在として生まれて来た自分」であることを自覚し、自分の存在も他人の存在も大切にしようとする心を育てる。	・自分がこの地球上にデビューした日。 ・出産は赤ん坊と母親との共同作業。 ・この世に誕生させた「すごい力」。 ・「すごい力で生まれて来た」自分の命。
	「小さな命の重さを感じとる」 1 時間 ・妊婦体験服着用。 ・赤ちゃん模型を抱く。	・妊婦体験を通して小さな命の重さを体験的にとらえ、自分自身が周囲の人の愛情に支えられながら大切に育てられてきた、かけがえのない存在だということを実感させる。	・妊婦体験。 ・赤ちゃん模型を抱く。 ・命を守り、育てるために大切なこと。
	「赤ちゃんふれあい体験」 1 時間 ・赤ちゃんとお母さんに来校していただき話を伺い、赤ちゃんとふれあう。	・母親から出産や子育ての喜びや大変さを聴いたり、赤ちゃんとのふれあいを通して命を大切に思う気持ちや親への感謝の気持ちを養う。	・出産子育てについて。 ・赤ちゃんふれあい体験。
2 年 男女の心身の違いを理解し、お互いを思いやる関係を作ることができる。	「さわやかな男女交際」 1 時間 ・ロールプレー。 ・話し合い。	・異性とどう関わっていけばよいか、考えることができる。 ・自分の気持ちを積極的に表現し、伝えることができる。	・アンケートを活用し、異性の違いを意識させ、お互いのよさを引き出していく。 ・異性との関わりについて男女の考え方の違いや望ましい交友について理解する。 ・中学生の異性交友についてマナーや正しい知識に基づく男女のよりよい行動について考える。
3 年 社会生活の中で出会う可能性のある様々な健康問題について考え、適正な意思決定・行動選択ができるような態度を養う。	「私たちの生き方を考える」 1 時間 学年集会形式で、学年職員と養護教諭が指導内容を分担して指導する。	・異性との関わりの中、安易な性行動から生じる諸問題（性感染症、エイズ、10 代の妊娠）について正しく理解し、その責任について考え、自分を大切にするこれからの生き方を学ばせる。	・男女交際について生徒がどのような意識を持っているかアンケートで確認させる。 ・保護者にもアンケートを実施し、特に性行為について考え方の違いについておさえる。 ・性感染症、エイズはどんな病気か、10 代の望まない妊娠について、男女交際には責任が伴うことをおさえる。 ・家族からのメッセージを伝える。

職員全体で取り組む

「命の授業」が水谷中学ではじまったのは、平成 21 年。当時の養護教諭が中心となり、3 年生の「これからの生き方を考える」がスタートした。

それを引き継ぎ、2 年の「さわやかな男女交際」、1 年生の「命について考える」を各学年 1 時間ずつ行うようになり、5 年前から「妊婦体験」、3 年前から「赤ちゃんふれあい体験」と、体験学習を増やしていった。「命の授業は、養護教諭だけでなく、学校全体を巻き込んでつくりあげ、計画的に行っています」と浅見隆志校長（取材当時）。

江原養護教諭も「養護教諭だけががんばってもつながらなかったと思います。ここまで継続できたのは、職員全体で作りに上げているからこそ」と語る。

「命の授業」は、担任、学年主任、副担任、養護教

諭、さらに学年外の教諭が参加することもある。たとえば、「さわやかな男女交際」を考えていく授業では、例として生徒たちにはロールプレイを見せるのだが、ロールプレイの生徒役は、学年外の若い教諭が引き受ける。

「実際の男女交際でよくありそうなやりとり、携帯電話のよくない使い方を盛り込んだシナリオを国語の先生が書いてくれて、それを先生方が生徒役になりきり上手に演じてくれるので、生徒たちは大喜びです。ありがちな男女のトラブルのロールプレイなので、リアルに男女交際について考えることができます」と江原養護教諭。

こうした性教育の年間指導計画に加え、今年は 1 年生と 3 年生を対象に、助産師の出前授業を行った。出前授業については次回、詳しく紹介したい。

（取材・文 中出三重／エム・シー・プレス）

連載第 15 回 ▶▶▶ 親が携帯を取り上げようとします。どうにかありませんか。

スマホが気になってしかたないです。LINE が入ったらすぐに返事しないといけないし。

また、わたしも、みんなに興味を持ってもらえるような写真や、意見を書かないと一人取り残されたような気になります。インスタの写真も毎日更新しないといけないし、スマホは手放せません。

ただ親は、ネットのしすぎだとか、やりすぎるとバカになると言って、スマホを取り上げようとします。とてもひどい話です。
どうにかありませんか。

スマホ中毒とかネット中毒とかの話をよく聞きます。数年前に Google 社のエリック・シュミット代表がこんなことを訴えました。「パソコンの電源を切ってください。携帯電話の電源を切ってください。周囲の人間らしさを発見しましょう」。

世界的な IT 企業の第一人者がこう語っているわけです。真摯に受け止めて考えないといけませんね。ネット依存とは、自分の意思でインターネットやスマホを止めることができない状態のことです。

スマホを触っていないと不安になる。イライラする。自分が何をしているのかわからなくなる。最後には、幻聴幻覚に悩まされるようになるなどの症状が出る場合があります。

ネット依存になると、

- ①身体的な影響：スマホを持つ姿勢をいつも取るので、首や肩や腕に痛みを感じて、動きも悪くなる（頸肩腕症候群）、眼精疲労、睡眠障害。
- ②精神的な影響：鬱病、昼夜逆転、ひきこもり。
- ③日常生活への影響：①や②の影響で学業や仕事に影響が出る。
- ④金銭的な問題：ネット料金、ゲームでの課金などお金がかかる。
- ⑤家族、対人関係への問題：人と会って直接コミュニケーションをとることが上手にできなくなる。

などの兆候が出てきます。スマホ依存の場合は、スマホ自体に依存しているわけではなく、繋がっている相手との関係性に依存をしています。繋がっていないと見捨てられるような感覚になります。そしてその関係性からまたストレスを感じ、さらに依存していくと

いう悪循環を繰り返すことになります。

喜びを感じる神経伝達物質にドーパミンがあります。喜びの刺激を感じると神経末端からドーパミンが放出され、ドーパミン受容体がそれを受け喜びを感じます。ネット依存に夢中になり高揚感が高まると、神経末端から大量のドーパミンが放出され続けるので、それをコントロールするために受容体の数を減らします。そうすると受容体が減っているので普通のドーパミン量では喜びを感じられなくなり、日常生活では幸せを感じられなくなり、毎日が不安で、辛くなり、行動に気力もなくなってきます。

また自尊心を失い、ひきこもりになっていき、鬱病などにも繋がってゆきます。この場合、刺激をやめて神経を休めなければ回復しません。スマホの使用を中断すれば、脳神経は回復すると言われています。従ってスマホを使ったら休みを入れなければいけないのです。スマホを使うなどと言っているわけではありません。一定の時間、一定の期間は思いっきりスマホを楽しんでください。その代わり、脳の回復のために必ず休みを入れましょう。お酒を飲む人に休肝日が必要なのと同じことです。

保護者にお願いします。スマホを子どもに使わせないではなくて、上手に使ってもらってください。そのために、子ども自身に使い方を事前によく理解させることが第一歩です。スマホの上手な使い方の本があります。使う前に本をしっかりと読んで、使い始めた後も、うまく使えているか、改めて本を読んでみましょう。取り上げるのではなく、これを親子で一緒に行ってください。

「レガシー」を生み出す変化

2020年の夏季オリンピック・パラリンピックは56年ぶりの東京開催となる。そうか、前の時は中学3年生だったなと回顧気分に浸りつつ、日本オリンピック委員会（JOC）の公式サイトを訪ねてみた。

トップページの写真はウエイトリフティングの三宅宏美選手。次に開いた時には体操の内村航平選手になっていた。男女のシンボルアスリートが交代で出てくる仕組みなのでしょうね。

おしかりを承知で書けば、ずいぶん変わったと半世紀前の中学生は思う。

1964年の東京五輪は10月10日が開会式だった。真夏ではなく、スポーツに最も適した季節に開かれている。高額なテレビ放映権料などに左右されることなく、アスリートファーストの常識が通じる時代だったというべきか。個人的には高校受験を控え、けっこう忙しい秋だったのだが、それでも白黒テレビの前で応援に夢中だった。

カラー放送の開始は1960年だから、当時もカラーテレビがなかったわけではない。ただし、東京の下町の裕福とはいえない家庭にまで3C（カー、クーラー、カラーテレビ）が普及するのはもう少し後のことだ。

「東洋の魔女」はソ連を破り金メダルに輝いた。ロシアなどというと、「おじいちゃん、古いなあ、ソ連だよ」と孫から教えられた時代である。スポーツ大国・ソ連が消えてしまうとは思ってもよらなかった。

バレーボールが五輪に登場するのは1964年の東京からだ。男女が同時に正式種目に採用された競技は珍しいのではないかな。五輪は男子種目中心という印象が当時の中学生にはあった。JOCのサイトに競技紹介というページがあるのでちょっと調べてみよう。

歴史をたどれば、古代オリンピックは『男性だけのもので、女性を見ることさえ許されなかった』という。近代五輪も第1回のアテネ大会（1896年）は男子種目のみだった。選手として女性が参加したのは4年後の第2回パリ大会（1900年）からで、このとき女子種目として採用されたのはテニスとゴルフだった。

オリンピックの代名詞ともいべきマラソンも男子のみだった時代が長く、女子マラソンが登場したのは1984年のロス五輪からだ。

水泳女子は1912年のストックホルム五輪から登場し、有名な「前畑がんばれ」のラジオ放送はその24年後のベルリン五輪だった。

バレーボールと同様、1964年東京五輪から登場した柔道も当時は男子のみ。日本は軽・中・重量級で金メダルを獲得したが、無差別級はオランダのアントン・ヘーシンクだった。女子柔道が正式種目になるのはそれから28年後の1992年バルセロナ五輪である。

オリンピックで女性が参加できる競技は男性より圧倒的に少なかった。逆の言い方をすれば、「男の」とか「紳士の」といった冠がつくスポーツがそれだけ多かった。1964年東京五輪では、サッカーもバスケットボールもレスリングもウエイトリフティングも男子種目のみで、女性が参加するのはずっと後のことだ。

2020年東京オリンピックでゴルフの競技会場となっている霞ヶ関カンツリー倶楽部（埼玉県川越市）は3月20日、定款の細則を変更し女性の正会員を認めることを臨時理事会で決めた。

海外の名門ゴルフクラブでも、会員を「男性」に限るという伝統的規則を変更するところがここ数年、増えている。女性の正会員を認めない規則は差別撤廃を掲げる五輪憲章に抵触するとして、会場変更を求める意見も国際オリンピック委員会（IOC）にはあった。

受験勉強も手につかなかった半世紀前の中学生には残念なことだが、「今度の東京五輪」は準備段階で何かとトラブルが多い。夢もしばみそうだ。それだけに逆に、ゴルフ会場の問題解決につながったクラブ側の自主的な判断には敬意を表したい。

最近「五輪のレガシー」という耳慣れない言葉をよく聞く。「遺産」と訳されることも多い。ただし、残すだけではレガシーとはいえないだろう。時代の流れを把握し、新たな価値と変化を生み出すものこそがレガシーと呼ぶにふさわしい。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

実存への誠実な眼差し

日本は元々、男色が盛んだったのに、明治以降、近代化とともに西洋の性欲学が輸入されると一転、通常の男女の性愛から逸脱する欲望は「変態」として病理化された。結果、同性同士の性愛は社会から「同性愛」として差別や偏見にさらされるようになり、当事者は負のアイデンティティを背負って生きていかざるをえなくなった。…という解釈が学術的に主流になったのは、1990年代以降。ざっくり言うと、(性的)アイデンティティは諸悪の根源であり、そうした近代の土俵に乗ってしまえば、差別構造を再生産することになる、という議論を喚起した。

1990年代といえば、日本でも「ゲイ」や「レズビアン」など、負のアイデンティティを反転させて権利を主張するアイデンティティ・ポリティクスが叫ばれるようになった時期でもある。皮肉なことに、アイデンティティ肯定と、アイデンティティ否定の言説はほとんど同時に声を上げることとなった。ベクトルを反対にする両者の緊張関係は、時代を先取りしていた面もあったし、あるいは、状況を停滞させる方向にも働いたのかもしれない(ちなみに、2010年代のLGBTムーブメントは、アイデンティティ・ポリティクスをやり直すところから始まる)。

そして今ここに、アイデンティティをめぐる議論に一石を投じる歴史観が登場した。前川直哉著『〈男性同性愛者〉の社会史』。著者の問題意識はこうだ。「大正時代の当事者男性たちは、自身の性のあり方を『変態』として周縁化する認識枠組みを、なぜ素直に受け入れたのだろうか。(略)当事者男性たちは、学者や権威が指示する分類に唯々諾々と従い、そこへ入り込んでいくだけの哀れな存在だった訳ではない。むしろ、史料からは、当事者男性たちが自ら「男性同性愛者」



〈男性同性愛者〉の社会史

前川直哉著
作品社
定価 2400 円＋税

というアイデンティティを、主体的に選び取っていく姿が浮かび上がってくる」

つまり、彼が描こうとしているのは、権力による抑圧史ではなく、当事者の主体性をも織り込んだ、権力と欲望の歴史なのだ。

著者は、大正期の性欲学の文献、戦後の変態雑誌、1970年代のゲイ雑誌などの投稿から、当事者の意思を丁寧に掬い上げていく。どの年代の当事者の悩みも大差なく、「周囲に打ち明けられない」悩み、「相手探し」の困難、結婚をめぐる苦悩が繰り返し表明されていた。そして、大正期の投稿にすら、「当事者男性たちが自己の特徴や経歴について語るプロセスは、『同性愛』を『病気』とする差別的な価値観に当事者男性が囚われる半面、同性への欲求を先天性を含む生物学的な問題として捉え、道義的な問題から自身を解放する側面も持っていた」と、その主体性を見出す。

また男性同性愛者たちの近代の歩みを、「憐れみの戦術」と「数の戦術」として捉え直しもする。生き残るためには病気も憐憫も利用し、さらに(特定の運動や個人の意図ではないにせよ)男性同性愛者が人口の中で一定比率を持つことを背景にして、自分たちの欲望を実現する範囲を拡大していった、と。

ここではもはや「アイデンティティは抑圧の装置である」という単純な悪玉論や、近代こそが抑圧だったという近代原因論は意味をなさない。「同性愛者」や「ホモ」といったアイデンティティは悪でも毘でもなく、社会の権力関係のなかで、当事者がより良く生きようとした「結果」にすぎない。

丹念に史料を掘り起こし、歴史への視角を転換して見せた著者の手腕は見事としてか言いようがないが、それを可能にしたのは、著者の人間に対する敬意かもしれない。安直に過去を理論に当てはめるのではなく、その時代を必死に生きた人々の実存への誠実な眼差しが、本書を貫いている。(作家 伏見憲明)

全国性教育研究団体連絡協議会

▶▶ 8月21日(月) 13:00～20:00
8月22日(火) 9:00～16:30 ◀◀

第47回 全国性教育研究大会

第13回中国四国地区性教育研究大会

第32回岡山県性教育研究大会

テーマ

性教育における今日的課題

～課題解決に向けた性教育の実践～

プログラム

- 1日目**：13:00～13:30 **開会行事** 挨拶・祝辞・次期開催地紹介
13:35～14:05 **開催地報告** 「岡山県性教育協議会の実践」
藤尾愛一郎（岡山県性教育協議会研修部長）
14:10～14:50 **基調講演** 「学校における性に関する指導について」
森 良一（文部科学省初等中等教育局教科調査官）
15:00～16:30 **記念講演** 「性同一性障害についての理解」中塚幹也（岡山大学大学院教授）
18:30～20:00 **懇親会** ピュアリティまきび（会費 4,500 円。参加自由）
- 2日目**：9:30～12:00 **分科会**
「小学校における性教育の実践」 「中学校における性教育の実践」
「高等学校における性教育の実践」 「特別支援教育における性教育の実践」
「情報社会の落とし穴」(仮題)
13:20～14:50 **課題別講義①**
「学校教育における性教育の考え方・進め方」
堀内比佐子（全国性教育研究団体連絡協議会事務局長）
「養護教諭の役割と関係機関との連携」
平松恵子（びわこ学院大学教授）
「自閉症スペクトラム症のある子への性」(仮題)
川上ちひろ（岐阜大学医学部医療教育開発センター）
15:00～16:30 **課題別講義②**
「性的マイノリティ」(仮題)
日高庸晴（宝塚大学教授）
「青少年の問題」(仮題)
上村茂仁（ウィメンズクリニック・かみむら院長）
「ジェンダーの捉え方と学校における性教育」(仮題)
瀬地山 角（東京大学教授）

会場 岡山県立大学（岡山県総社市窪木 111 TEL 0866-94-2111）

定員・締切 定員・締切／300名・平成29年7月31日（月）締切（定員になり次第締切）

参加費・問い合わせ先等

参加費／両日参加：一般 6,000 円、学生 2,000 円、1日参加：一般 3,000 円、学生 2,000 円

主催／全国性教育研究団体連絡協議会、中国四国地区性教育研究団体連絡協議会、岡山県性教育協議会

協賛／日本性教育協会 後援／内閣府、文部科学省、厚生労働省ほか

問合せ先／TEL・FAX 0863-81-6483（三浦）

▶▶ 7月8日(土) 15:00 ~ 17:30 ◀◀

第21回 関西性教育研修セミナー

北欧における性教育と家族支援

性教育の「先進国」北欧では、早期からの性教育が当たり前というだけでなく、さまざまな家族支援サービス／システムも充実しています。今回のセミナーでは、ヘルシンキ在住の Ervasti さんをお迎えし、「北欧における性教育と家族支援」についてご講演をいただきます。Ervasti さんは、かつて Sexpo 財団^(注)のカウンセリング部長も務められたカップル／家族セラピーや性教育の専門家であり、特にセクシュアル・アイデンティティやトランスジェンダー、トラウマ、HIV とセクシュアリティなどのテーマに高い関心と豊富な経験をお持ちです。

子どもたちの肯定的で、健康的な自尊感情を育むためには、どのような家族支援が有効で、どういった性教育が必要なのでしょう。今回の司会とコメンテーターは、土肥いつきさん(高校教員／トランスジェンダー全国生徒交流会世話人)です。

(注) 1969年に設立されたフィンランド(ジェンダー・ギャップが最も小さな国の一つ)の最古・最大のセクシュアリティに関する専門機関。

会場 梅田ガクトホール

(大阪市北区梅田 2-6-20 パシフィックマークス西梅田 14 F)

参加費・問合せ先等

参加費：一般 1,000 円、学生 500 円 主 催：関西性教育研修セミナー実行委員会 協 賛：日本性教育協会

対象者：どなたでも(予約不要)

問合せ先：E-mail kansaishy@gmail.com

8/4(金)
8/6(日)

第24回 AIDS 文化フォーラム in 横浜

リアルとであう

☆ HIV/AIDS(エイズ)、社会、文化、自分 つながりが見えるイベント☆

国際・文化・医療・教育・福祉・人権・セクシュアリティ・ジェンダーなどテーマは様々。一人ひとりを大切にする、ともに生きる社会とは何かについて考えるフォーラムです。このフォーラムでは、「文化」を大切にしています。HIV/AIDS(エイズ)の問題を単に医療の面だけでとらえるのではなく、私たちの生活＝「文化」と深く結びついているものだと考えています。

★主なプログラム★(詳細はホームページをご覧ください)

〈1日目〉10:00～ オープニング「リアルとであう」下村健一(白鷗大学客員教授・元 TBS 報道キャスター)
吉沢明歩(タレント・現役セクシー女優)

13:00～ 講演会(講師・下村健一):若者を取り巻くコミュニケーションを語る

15:30～ 講演会(講師・松本俊彦):精神科医がドラッグと社会の現実を語る

〈2日目〉13:00～ 講演会「宗教とエイズ」:僧侶、神父、牧師、医師のここでしか聞けない本音トーク

15:30～ 講演会:三ツ矢雄二(声優)×コンドームの達人(岩室紳也)のトーク

〈3日目〉10:00～ 講演会(講師・上村茂仁):日々、若者の現実と向き合う「若者からの相談に日々 SNS で答える」

13:00～ 講演会(講師・水谷 修):夜回り先生が、薬物・いじめなど若者を取り巻く問題を語る

【会場】かながわ県民センター(神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2)

【問い合わせ先等】

参加費／自由参加・入場無料 問合せ先／AIDS 文化フォーラム in 横浜 事務局

〒231-8458 横浜市中区常盤町 1-7 横浜 YMCA 内 TEL 045-662-3721

URL <http://www.yokohamaymca.org/AIDS/> E-mail: abf@yokohamaymca.org



8月25日(金)～27日(日)



第36回 日本思春期学会総会・学術集会

いのちのバトンを繋ぐ

— いのちが生まれるもの、変えるもの —

学術集会内容

第1日目 8月26日(土)

●会長講演「いのちのバトン」(齋藤益子) ●特別講演1「いのちをみつめる～人のいのちのはじまり～」(伊藤一彦) ●特別講演2「若者たちの性に何が起きているか～セックス嫌いな若者たち～」(北村邦夫) ●特別講演3「思春期と思秋期 歌&トーク」(歌:岩崎宏美 トーク:松峯寿美) ●シンポジウム1「若年妊娠への支援を考える」 ●ワークショップ1「男の子の性教育」 ●教育講演1「子どもの生活(食事・運動)と生活習慣病との関連」(杉原茂孝) ほか。

第2日目 8月27日(日)

●ワークショップ2「性の健康と生命危機への支援」 ●シンポジウム2「性暴力を予防するための思春期の教育や対応」 ●シンポジウム3「地域・学校・家庭と連携して子ども達の性と生を支える」 ●特別講演4「折れない心を育てる～「レジリエンス」の視点から～」(藤井聡) ●教育講演2「妊孕性を高める～思春期からの不妊予防～」(原利夫) ●教育講演3「思春期からの女性のヘルスケア」(山口昌俊・榎原秀也) ほか。

会場 宮崎シーガイア コンベンションセンター (宮崎市山崎町浜山)

参加費・問合せ先等

参加費: 学術集会〔抄録集代(3,000円)は含まない〕 事前: 正会員 8,000円(当日 10,000円) 非会員 8,000円(当日・一日につき 5,000円) 学生(高校生以上) 3,000円 思春期保健相談士 5,000円(当日 10,000円)

事務局: 東京事務局: 帝京科学大学医療科学部看護学科 志村 TEL&FAX 03-6910-3501 E-mail:shisyunki36@gmail.com
宮崎事務局: 宮崎県立看護大学 別科助産専攻 濱崎 TEL 0985-59-7719 FAX 0985-59-7779 E-mail:bekka-mw@mpu.ac.jp

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】必ず事前に電話で予約が必要です (tel 03-6801-9307)。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】月～金曜日 10:30～17:30

【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始 ※この他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<http://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室利用方法

収集文献・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー(自然科学系、人文・社会学系)、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際(海外団体資料・海外学術誌)、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

<http://www3.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>

関西性教育研修セミナー 10 周年記念誌

性について、語る、学ぶ、考える



昨今は、性教育・性科学の世界にも新しい風が吹きつつある。性教育をめぐる5W 1H（誰が、何を、誰に、いつ、どこで、どのように教えるのか）には、異なる価値観の対立が伴うがゆえに、時として激しいバッシングに見舞われることもある。同時代を生きる古い仲間や新しい仲間とのつながりを大切にしつつ、性教育を次世代につなぐために自分たちにできることとは何かを常に問い続けてゆきたい。

本書は、関西性教育研修セミナーの10年間の取り組みをまとめるとともに、セミナー登壇者の何人かをお願いし、現在の性の課題と今後の展望について執筆いただいた。さまざまな現場や経験に基づくバリエーションある報告は、まさに性の幅広い側面を示している。

- 編集／関西性教育研修セミナー実行委員会
- 発行／日本性教育協会
- A4判・ソフトカバー 128頁
- 頒価 800円

主な目次

性暴力

教育現場における性暴力被害への支援と課題／野坂祐子
性暴力の「理解」と「治療教育」を求めて／藤岡淳子
規定される性、聞こえない声。／岡田実穂
資料

HIV / AIDS

記者から見たエイズ対策／宮田一雄
「ちいさな学校」の経験／ブブ・ド・ラ・マドレーヌ
HIV / エイズについての医療現場からのメッセージ／白野倫徳
HIV と性の健康／生島 嗣
資料

性の多様性

「語る」社会か「語らなくていい」社会か／土肥いつき
性別違和と子どもたち／康 純

「性」について考えること：西から東、そして北東北へ／宇佐美翔子
「性の多様性」と共生する社会に向けて／東 優子
資料

性教育

30年の性教育の実践／秋山繁治
知的障がいのある生徒への性の指導と支援／池川典子
LGBTを排除しない性教育のあり方／東 優子
資料

性と社会

社会は性に蓋をかぶせる／池上千寿子
「死にたいと思いつつも、助けてほしい」／渋谷哲也
二人の性科学者とNature vs. Nurture 論争／東 優子
性科学／教育の過去・現在・未来／ミルトン・ダイヤモンド
資料

◆本書は JASE ホームページ <http://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html> からお申し込みいただけます。

または、Email info_jase@faje.or.jp TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478 までお申し込みください。